

隨泉寺寺報

平成 24 年 (2012 年) 10 月号 第 506 号

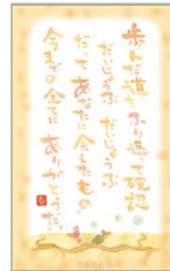
TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

秋季永代経法要

講師 寺住職 吉崎 哲真師

講題 『贈り物のころ』



■永代経法要 ～縁のある人々のご恩を偲ぶ法要～

歩んだ道をふり返って確認 だいじょうぶ だいじょうぶ
だってあなたに会えたもの いままでの全てに ありがとう 澤田直見

不思議な縁で親子兄弟、夫婦となりました。お育てをいただいたご恩、教えていただいたご恩、そのご恩を永代忘れません。自分の人生を振り返りようこそ、ようこそ、出会うことが出来ました。

永代経の懇志は、亡くなられた方をご縁にして、お寺が護持され、それによってみ教えが「永代にわたって維持されますように」という願いが、実は永代経懇志を進納する人の本来の願いです。

永代経の永代とは、法（釈尊の教え）が永代に受け継がれてゆくという意味をもつものであり、まさに「念仏の声を世界に子や孫に」とのスローガンにあらわされるところにほかなりません。

そして、永代経懇志が寺院とみ教えを護持する基盤になることによって、「自らが如来の教法にめざめるとともに、他の人びとのめざめの縁になる」ということを明らかにして行くべきでありましょう。

10月の法座予定

- 10月 2日 …………… 本部役員会
- 10月 14日 …………… 掃除 平原上第1
- 10月 15日朝席午前10時より …… 若い婦人の集い おとき
- 10月 15日昼席午後1時より …… 秋季永代経法要 引き続き修復委員会
- 11月 1日午後6時より …………… 門信徒会本部役員会

☆ 念仏一筋に生き いた信心の人 有福の善太郎

11月の研修旅行に行く浄光寺は妙好人として有名な、有福の善太郎さんのお手次のお寺です。

無寿経に、念仏一筋に生き いた信心の人を、「上上人・好人・妙好人・最勝人・稀有人」とほめたたえられています。

山陰特に石見地方には、妙好人とたたえられ親しまれてきた方が数多くおられます。鈴木大拙氏は、その著「妙好人」の中で、「石見国は妙好人のよく出るところと見える」と述べています。

恵まれない自然の中にも溫柔な人柄。山間の農林業、海岸の水産業でわずかに生活を支え、そして文化に遠い土地柄。そのような人間性と厳しい生活環境が、お念仏のみ教えを吸い込んでゆく、よき土壌となったのでしょうか。

有福の善太郎さんは1782(天明2)年10月、現在の島根県浜田市下有福町に生まれました。

5歳で母キヨと死したこともあってか、若い頃は暗くすさんだ「毛虫の悪太郎」の日々を送ったそうです。トヨと結婚しましたが、4人の愛娘を、11年の間に次々と失うという深い悲しみに出遭いました。以来「よくよく重ねて重ねてご開山のご意見にとりつめてお聞かせに遇うて」ついに念仏の法にめぐりあうことができ、その感動と喜びが生涯を支えることとなりました。筆ももったことのない農民善太郎が、後半生、独特な字を連ねて筆まめに書いた、あたたかい体温と土のくもりを感じさせる筆跡が、今も数多く残されています。74歳の11月に長い手紙を書きつづり、その最後を「金剛の信心ばかりにてながく生死をへだてける、この善太郎」と結んでいます。年が明けて1856(安政3)年2月8日、75歳、「有福の念仏ガニ」の生涯を静かに終えました。



☆ 若い婦人の集い 10月15日午前10時～

10月15日朝席は若い婦人の集いです。とはいっても昔若かった人もどうぞお参りください。出来れば若い人を誘ってお参りください。本堂が若い人や昔若かった人でいっぱいになれば、うれしいなと思っています。今回は一日だけの法座です。誘い合わせてお参りください。これから当分本堂での御法座はお休みですから、ぜひともお参りください。

☆御礼

永代経懇志	金	拾萬円	有谷喜久雄殿	故	有谷 久夫様	特	永代経志として
永代経懇志	金	拾萬円	上本 秀征殿	故	上本 五月様	特	永代経志として
永代経懇志	金	拾萬円	佐々木 薫殿	故	佐々木正信様	特	永代経志として

☆御礼

門信徒会へ 金 一封 佐々木 薫殿 故 佐々木 正信様 香典返しとして

10月

「よろこび」の種をまこう 東井 義雄師

私が中学校の校長を勤めさせてもらっていた頃のお正月でした。例年のように「おめでとうございます」の会を開きました。そのとき、私は、「大黒さまは、いつ見ても背中に大きな袋をかついでいらっしやる。そして、いつ見てもニコニコしていらっしやる。生徒の皆さん、あの袋の中には、いったい、何がはいっているのだろうか。いつもニコニコしていらっしやる所をみると、だいぶ、いいものがはいっているにちがいないのだが、何がはいっているのだろうか？」と、質問しました。一斉に手があがりました。一人の生徒を指名しますと、「きっと、お金がたくさんはいっているのだと思います。だからあんなうれしそうな顔をしていらっしやるのだと思います」「ほかの考えの人はいませんか？」と、尋ねてみましたが、一人も手をあげる生徒はいませんでした。みんな、一人残らず、お金がはいっていると信じているようでした。

「そうかもしれないね。あんな大きな袋にお金を入れたらずいぶんたくさんはいるだろうな。だからあんなうれしそうな顔をしていらっしやるのかもしれないね。だけど、ずいぶん重いだろうな。かついだときは嬉しかったろうが、その重みがだんだん肩にいくいこんできたら、しかめっつらになってくるのではないだろうか。だのに大黒さまは、いつもニコニコしていらっしやる。ひょっとすると、お金ではないかもしれないよ。お金でないとすると何だろうか？」と、問いをまた生徒に返しました。

いつまで待っても手があがりません。その中、生徒の一人が、「校長先生は何がはいっているとお考えですか？」と、逆襲してきました。

「さて、私にも確かなことはわからないが、ひょっとすると、あの中には『よろこび』がはいっているのではないだろうか。だから、あんなに嬉しそうな顔をしていらっしやるのではないだろうか」と、答えました。そして、「私たちは、みんな、それぞれ、背中に一つずつ袋をいただいているのではないだろうか。そして、しあわせな人というのは、背中にたくさん『よろこび』を貯えている人のこと、不幸な人というのは、背中の袋に、不平・不満・愚痴を入れて背負っている人といえるのではないだろうか。(中略)ところが、私は町の大売出しの福引き券をひいても、マッチの小箱くらいしかあたったことはない。私はどうやらそういう宿命を背負っているらしい。だか



ら『大きいよろこび』とは無縁らしい。そこで、考えた。みんなが拾い忘れていた『小さいよろこび』をたくさん貯えることにした」と、宣言したことでした。

「今まで、ほんとうにありがとう・・・。」

周りに常に気を配り、片時もじっとしていることのない、働き者の母でした。家を掃除したり、手芸をしたりとたえず手を動かしていた姿を思い出します。子供の頃、私が喧嘩をして泣いて帰ってくると、負けず嫌いな母によく叱られたものです。戦前、戦後の激しい時代に、母は大変苦勞をしたと聞いています。どんなことも乗り越えてきたからこそ、私にも強くなってほしいと願っていたのでしょう。後年は孫に深い愛情を注ぎ、その元気な顔を見るのをいつも心待ちにしておりました。母、貞子は平成24年7月18日、91年の生涯を閉じました。人に迷惑をかけたくないと、最後まで気丈に生きた母。「ありがとう」と心からの感謝を伝えながら、皆で暖かく見送ります。母を支えてくださった地域の方々をはじめ、生前お世話になりました皆様に深く感謝申し上げます。本日はご多用のなかご会葬いただき、誠にありがとうございました。略儀ながら書状をもちまして厚く御礼申し上げます。

平成24年7月20日 重田一彦
法名 釋貞真 俗名 重田貞子 平成24年7月18日往生 行年 92歳

よりそう影 日の光 金子みすゞ

おてんと様のお使いが 揃（そろ）って空をたちました。
みちで出逢ったみなみ風、「何しに、どこへ」とききました。
一人は答えていました。「この〈明るさ〉を地に撒くの、みんながお仕事できるよう。」
ひとりはさもさも嬉しそう。「私はお花を咲かせるの、世界をたのしくするために。」
一人はやさしく、おとなしく、「私は清いたましいの、のぼる反(そ)り橋かけるのよ。」
残った一人はさみしそう。「私は〈影〉をつくるため、やっぱりいっしょにまいります」

四人のお日様のお使いです。
最初の三人は、お日様のお使いらしく、「明るさ」「楽しさ」「清らかさ」を与えるために、元気です。 けれども最後の一人は、「影」をつくるのが役割です。
なんとも寂しく、むなしく、やりきれません。 けれど光には影がつきものなのです。
嫌でも一緒についていかねばならないのです。
だれもが幸せを願うけれど、どうしても思い りにならないことも起こるのです。
仏教では「人生は苦なり」と示します。
人生には逃れることの出来ない苦しみがあることを、金子みすゞさんはまっすぐに見つめるのです。